



特集 - 真珠産業 - 日本一を守る

全国に誇る特産品「宇和島真珠」。
平成8年に確認された赤変病によるアコヤ貝の大量へい死から、
20年以上が経過した令和元年。
アコヤ貝の稚貝を中心とした大量へい死が相次ぎ、当時を思い起
こすような出来事が発生しました。

でも、暗い話ばかりではありません。
生産量日本一という誇りを守るために一。
若手養殖業者たちが奮闘しています。



研究機材と試験サンプル

日本一を支える「感覚と経験」を 分析

「こうすればきれいな真珠ができる」とか、「この時期の作業は貝を弱らせる」など、真珠養殖の手法は養殖業者ごとに異なります。

また、海の環境変化などに伴い、真珠養殖の難しさは年を追うごとに増してきています。

真珠産業をデータの力で分析する。

安定生産に向けた取り組みを紹介します。

もともと校長室だった部屋には、大学の研究室そのものの研究機材が並び、教室には収集した試験データが保管されています。ホルマリン漬けたアコヤ貝の身や、定期的に採取した海水など真珠養殖に関するさまざまなデータがそろいます。また校庭には、真珠養殖業者たちが試験中の貝を持ち寄ったりと、真珠産業の関係者たちが集う場所としても活用されています。

廃校となった旧小池小学校を活用して、平成29年に市水産振興センターが設置されました。その中に、愛媛大学農学部三浦猛研究室の分室が置かれ、真珠養殖全般に関する試験と研究が続いています。同大学研究員の岩井さんが常駐し、養殖業者と協力して試験データの収集や分析などを行っています。

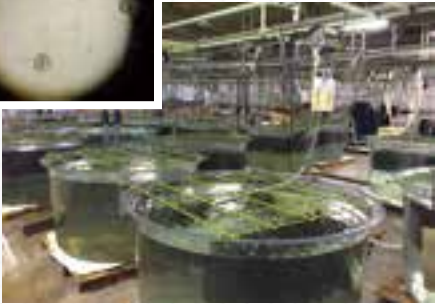
校長室に研究機材がズラリ



若手養殖業者らと試験結果を共有

真珠ができるまで

水槽飼育の適温は25度前後。気温が高くなる前の春先に行われます。今回の大量へい死を受けて、8月の暑い時期にもかかわらず、急ぎよこの作業が行われました。



種苗生産

選抜された親貝から卵と精子を取り出して人工授精させます。生まれた赤ちゃん貝は、50日間程度水槽で育てられます。



親貝の選抜

種苗業者が優良な遺伝子をもつ親貝を選抜。貝の色味や手に取ったときの重さなど、感覚と経験で選抜されています。



「真珠養殖」と聞くと、どのような作業工程を思い浮かべますか？
真珠ができるまではさまざまな形で関係者が携わっています。

どんな真珠ができるかは、貝を開けてみるまで分かりません。



最終段階

母貝に真珠の元となる「真珠核」と「細胞」を入れます(挿核)。その後は、母貝が真珠を育てるまで、貝殻に付いたゴミを掃除したりと大切に育てられます。



母貝を育てる

水槽で育てられた貝は、母貝養殖業者により大人の貝になるまで海で育てられます。育てられた貝は、真珠養殖業者に渡されます。

Interview

データが活きる

研究者として、データ収集や解析は得意分野。専門としていた魚の研究が、真珠養殖にも活かせられるところが興味を持ちました。

魚のエサであれば、成長に効果的なデータ分析などが進んでいます。しかし同じ海のことでも、真珠養殖はデータを根拠とした養殖技術などが確立されていません。海水温や貝の生態、オス・メスなどによる違いがあるはず。そこにデータの力が活かせると思います。

データ分析のためには、大量のサンプルデータが必要です。今回、また大量へい死が起こり苦しい状況だけれど、今しかとれないこのデータは貴重な資料になります。養殖業者の皆さんから現場の情報をもらい、私はそれを分析して有益な情報を還元する。活躍する分野は違っても、お互いの得意分野を活かして安定生産を目指しています。



【愛媛大学 農学部
客員研究員 岩井 さん】
得意分野のデータ解析で真珠の安定生産に向けた活動をサポート



若手の奮闘

市水産振興センターを拠点に、愛媛大学の岩井さんと活動を共にしているのが、20～40代の若手真珠養殖業者で結成されたNPO法人「あこや真珠交流会」。

経験だけではなくデータを活用して、安定的な養殖技術の確立を目指します。

技術の共有と試行錯誤

NPO法人「あこや真珠交流会」は、平成19年に津島町下灘漁協の有志10人の集まりから活動が始まりました。今では、種苗・母貝・真珠養殖などの工程に携わる養殖業者のほかに、愛媛大学の岩井さんも加わり約50人で活動しています。月1回は市水産振興センターに集まり、それぞれの試験結果を持ち寄り報告をしています。

彼らの目標は、貝の重さや色味の良さなど感覚や経験で判断するのではなく、自分たちで集めた試験データを元に優良な母貝を選抜し、安定的にきれいな真珠を作ることです。

現在は、各地区の海の状況や細胞

による違いのほかにも貝の性別や挿核方法などによる生産性の違いなど、それぞれが分担し試験データを収集しています。

昨年は沖での養殖が良いと言っていたのに、今年は沖の貝が死んでしまふことが多かった。毎年変わる環境に振り回されながら試行錯誤を繰り返しています。この地道な取り組みは将来、安定的な養殖技術を確立し、日本一の産地を守りさらに発展させていくことと期待されます。





【月に1回行われる
情報共有会議】
試験結果を持ち寄
り、貝や真珠の状
態を確認。「この地
域の貝はよく太っ
ている」「こっちの
試験では、綺麗な
真珠が比較的多く
確認された」など、
地域や試験方法
による違いを共
有し合います。



パールフェスティバル inうわじま2019

【と き】11月9日(土)・10日(日) 午前10時～
午後5時

【ところ】南予文化会館

【内 容】「真珠のまち宇和島」だからこそ
できる、年に1度の夢の祭典。真珠専門店
7社が集い、選りすぐりの宇和島真珠を通
常小売価格の30～50%割引のスペシャル
プライスで展示販売します。

※「真珠ができるまで」動画放映もあります。

【問合先】商工観光課 ☎49-7080



「儲ける」がすべてではなくなった

海の環境変化などから「真珠養殖をやれば儲
かる」時代は終わり、今では続けられる人とそ
うでない人との格差が大きくなってきました。
この状態が続けば辞める人が増え、産地として
やっていけなくなってしまう。そう考え始めて
からは儲けるためだけではなく、産地を守って
いくという気持ちが強くなってきました。

養殖業者にはそれぞれ独自のやり方があり、
お互いの技術について積極的に情報交換をする
こともありませんでした。しかしこれからは、
情報交換をして、品質
の良い真珠を安定して作
り出せる技術を見つけて
いかなければいけませ
ん。私たちの想いはひと
つ「日本一の産地を守り
続けること」。そのため
には、データの力が鍵と
なってくるはずです。



【NPO法人 あこや真
珠交流会 木下理事長】